

北海教区が大切にしてきたもの

教団宣教基礎理論

京葉中部教会 山本光一

2013年10月13日 信徒と教職の共同研修
於：北海道クリスチャンセンター

2013年10月14日 教職講座
於：しんしのつ温泉・たっぷの湯

北海教区が大切にしてきたもの 教団宣教基礎理論

京葉中部教会 山本光一

これは、2013年10月13日「信徒と教職の共同研修」において、また10月14日北海教区教職講座において行った発題の要約です。

1. 自己紹介
2. キリスト教理解の「血」のようなもの
3. 宣教基礎理論とは何か
4. 神の宣教の神学 神→教会→世界から、神→世界→教会へ
5. 宣教基本方策・宣教基礎理論 京葉中部教会の場合
6. 教勢低迷の原因は宣教基本方策と宣教基礎理論にあるのか？

1 自己紹介

わたしは、1952年に北海道の帯広で生まれ、学生として京都に行くまで札幌で育ち、両親と共に札幌北光教会の信徒として過ごしました。1979年から1983年まで滋賀県にある近江八幡教会の担任教師、1983年から1989年まで岡山県にある琴浦教会の主任担任教師、1989年の春に再び札幌に戻り2002年まで札幌元町教会の主任担任教師、2002の春から2010年まで北海教区幹事として過ごしました。現在は2010年から千葉県にある京葉中部教会の主任担任教師として働いています。

2 キリスト教理解の「血」のようなもの

中学・高校生の時代（1965年～1971年）に、わたしは「宣教基本方策・宣教基礎理論」「ミッシオ・デイ（Missio Dei 神御自身の宣教、神の宣教）」を教えられてわたしのキリスト教理解の血のようなものができた、と今になって思います。

わたしは当時「宣教基本方策・宣教基礎理論」「ミッシオ・デイ」などという言葉は知りませんでした。中学生時代は、罪の悔い改めと回心を迫るケズイック・コンベンションに熱心に喜んで参加する信徒でありました。

1968年の夏、札幌北光教会の主日礼拝中に配布された「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」⁽¹⁾は、ようやく日本が戦争中に何をしてきたのかを勉強し始めた高校生のわたしには涙をもって告白するものとなりました。

1968年秋、札幌地方裁判所は長沼ミサイル基地訴訟公判⁽²⁾を開始、たくさんのキリスト者が原告である長沼町民を支援してこれに参加していました。また、この年、札幌市内の教会は、活発に靖国神社国家護持法案反対の運動を行っていました⁽³⁾

わたしは「教会が政治的問題に取り組むと、この世の問題が教会に持ち込まれ、教会は教会で無くなる」と主張していたのです。しかし、教会の牧師や信徒たちに誘われて下校途中に公判前夜のテント学習会に参加しているうちに、「教会が平和の問題に関心を持つことは大切なことなのではないか。この場所（札幌地裁の裁判）では、わたしたちのいのちとくらしに関わるものが真剣に考えられている」と思うようになり始めました。

「宣教基本方策・宣教基礎理論」「ミッシオ・デイ」は、わたしが神学的な勉強をした結果、選択されたものではありませんでした。しかし、わたしの中で中学・高校生時代に大きな信仰上のパラダイム転換が起こったことは確かであり、そこには選択とキリスト者としての決断があったように思います。

3 宣教基礎理論とは何か

(1) 宣教基本方策と宣教基礎理論の策定

戦後の福音伝道の歩みは、海外からの歴大な資金を投入して始まり、1950年代の一時のキリスト教ブームの波が引いて、1960年代には必ずしも伝道の効果があったと言える状態ではありませんでした。

更に、1960年代、日本社会の産業構造と人々の意識はこれまでにない急激な変化を遂げようとしていましたから、日本基督教団には、教勢が進展しないことへの深刻な反省とともに新たな伝道方策の策定が求められました。

1963年に発表された「宣教基本方策にもとづく宣教基礎理論」の冒頭（序の二のイ）は、これまでの伝道の成果を評価してこう書いています。

「宣教百年の歴史を省みて、数々のすぐれた先人の努力と貢献がありました。しかし、全般的には、この世の歴史を動かす教会としての、十分な力を発揮できなかったうらみがあります。

第二次世界大戦後新発足してからも、次々と諸種の運動をくりかえしたにもかかわらず、世にある教会としての、根本的な姿勢の問題が徹底的に反省されないまままで今日に至りました。」⁽⁴⁾

また、「日本基督教団史資料集」は、1961年10月に教団常議員会で可決された「宣教基本方策」を解説してこう書いています。

「この『宣教基本方策』は、教団が一九五〇年代に莫大な外国資金により伝道したにもかかわらず、福音が大衆に浸透しないし教団の教勢は伸びないという反省から出発し、日本の宣教第二世紀に向かう教団の基本方策を打ち出そうとした。それは、すべての人々への宣教の責任を果たす教会、この世に奉仕する教会の形成ということであった。そこで強調されたのは、自己中心的な殻を破り社会的責任を負う教会への『体質改善』と、地域社会に対して連带的に働きかける『伝道圏伝道』ということであった。」⁽⁵⁾

(2) 「伝道圏伝道」と「教会の体質改善」

宣教基本方策・宣教基礎理論には、「伝道圏伝道」と「教会の体質改善」の両輪が存在していました。

現在の北海教区の標語は、「革新・連帯・平和」ですが、以前は「革新・連帯・前進」でした。

この標語が決められた経緯は勉強不足で分からないのですが、おそらく、宣教基本方策・宣教基礎理論を支持したものだろうと思います。革新は教会の体質改善、連帯は伝道圏伝道、その両輪で前進するという意図があったのではないのでしょうか。

教会の体質改善は、「社会問題という食べ物を食べても（取り込んでも）アレルギーを起こさない体質となること」との日本基督教団議長であった鈴木正久の説明が印象的です。

伝道圏伝道は、伝道や地域の問題に複数の教会が協力して取り組むことと説明されました。これは後に述べますが宣教基本方策が策定されるまでの日本基督教団伝道委員会がした職域伝道の実践に注目する必要があります。

そして、教会はこの世に仕える（奉仕する）姿勢が大切であると強調されました。

4 神の宣教の神学 神→教会→世界から、神→世界→教会へ

「この世で達成されるべき救いの使命(ミッション)を持っているのは、教会ではない。それは御父を通しての御子と聖霊との派遣(ミッション)によるのであり、そこに教会が含まれるのである」⁽⁶⁾

(1) 神の宣教の神学

宣教基本方策・宣教基礎理論の神学的裏付けは、ミッシオ・デイ (Missio Dei、神の宣教) の神学でありました。ミッシオ・デイは、「神はすでにこの世に宣教の業を働かされている」と神・世界・教会の3者の関係についての理解の大転換を教会に迫ります。

わたしが高校生の頃、「教会は、神を知らず、まだ救われていない人たちを救うために伝道をしている」と説明されていました。しかし、すでに洗礼を受けて教会に居たわたしは、自分は救われているのか疑問でした。まだ教会に来ていない学校の友達に救われていないのか、疑問でした。

その頃読んだ『現代における宣教と礼拝』(J.G. Davis 1966 "Worship and mission" J.G. デーヴィス 1968 岸本洋一(訳))は、その疑問に良く答えてくれました。

デビッド・ボッシュによれば、カール・バルトが「宣教が神ご自身の活動であることを明瞭に語る最初の神学者」でありました。⁽⁷⁾

わたしのくどい説明よりも、下記の、すでに1922年に書かれたカール・バルトの『ロマ書講解』⁽⁸⁾を読んでいただいたほうがミッシオ・デイとは何かがお分かりになると思います。

「彼ら(異邦人)が、われわれの『神の言葉』にかくも無頓着なのは、彼らが早くからわれわれなしにそれを聞いているからであり、早くから自分自身でそれを告知しているからである。世俗者や非聖者や無信仰の者が赤裸々の惨状にしながら、あるいはまた自由な明朗さの中に暮らしながら、われわれの説教や牧会の対象にはならず、われわれの福音化運動や宣教や弁証や救済運動の対象とならず、またわれわれの「愛」の対象とならないのは、われわれが立ち上がって彼らを憐れむよりずっと先に彼らが神の憐憫によって捜し出され、すでに神の義の光の中に立ち、既に赦罪にあずかり、すでに復活の力と服従の力とを分有し、既に永遠を恐れ、また既に永遠に望みをかけ、既に実存的に神に身を投じているからである！」

(2) 宣教の目的は、人間の自然的な生活に宗教的次元を付け加えることではない

『現代における宣教と礼拝』は、世界教会協議会(WCC)・宣教研究部の「教会の宣教的構造」に関する西ヨーロッパ研究グループの作業が背景となっています。

本書は、最初の章において礼拝と宣教との一致について考察し、次の章で宣教の意味を検討する作業へと導き、そこで得られた定義に基づいて不相当と思われる宣教理解の検討へと導きます。

この本は半世紀前に書かれたものですが、わたしたち(現在の、日本キリスト教団の、北海教区の)に、重要な示唆を与えるものです。1章と2章の要点を記すと下記ようになります。

第1章 礼拝と宣教の一致

- ① これまで礼拝と宣教は、相互に全く異なった神学の領域とみなされ、それぞれに独立した小部屋に隔離されてきました。

- ② 宣教に関心を示さない一方のグループは、宣教を一種の行動主義者としか考えません。あるいは、せいぜい礼拝のわざの副産物としか考えません。
- ③ この時、キリスト者の集団は、宗教的演技を行うにすぎない集団となり、関心をこの世ではなく、自分の教会員にだけ集中し、社会全体に対しては、ほとんど責任を覚えない傾向に陥ります。
- ④ 他方、礼拝に全く関心を示さないグループは、礼拝を外向きの姿勢に対照的な祭儀的内向性としか考えず、この時、このグループは、自己賞賛と自己誇張とも言うべき歪を起こしてしまいます。
- ⑤ しかし、礼拝と宣教の不一致は新約聖書において存在しません。なぜならば、新約聖書が報告するところによれば、礼拝はこの世の日常生活において起こるからです。⁽⁹⁾
 聖書に登場する人々は「宣教と礼拝を互いに反発しあう二領域とは見做さず、現実の全体性を放棄」(D. ボンヘッファー) してはいません。

第2章 宣教の意味

本書は、これについても、聖書に根拠を見出しています。

- ① 旧約聖書と新約聖書の間にある宣教理解の大きな差異
 旧約聖書によればイスラエルは神に選ばれた人々であって、異邦人は「選ばれた民」の模範にふれて、魅了されてイスラエル（特にシオン）に集まってきます。全世界に出かけていくという思想はありません。
- ② ところが、新約聖書は、旧約聖書にはない、全く新しいものをもたらしています。
 この新しいものとは、もろもろの国に向かって宣べ伝えることの委託、つまり、求心的ではなく、遠心的な宣教です。(マタイ福音書 28 : 18)
- ③ イエスによって、弟子達は権威（マタイ福音書では王としての権威、マルコ福音書では解放者としての権威、ルカ福音書では癒す者としての権威）を与えられ、そして伝道（ミッションズ）に出かけるよう命ぜられます。
- ④ 本書においては、ここではじめて宣教という言葉と伝道という言葉が区別されます。
 宣教 (mission) とは、教会がそれに参与する神の御業です。
 伝道 (missions) とは、この参与の時と所により、また、必要に応じてとられる特定のかたちです。
- ⑤ さらに、「神の宣教に参与するとは、教会にとって、どのようなことを意味するのか」との設問があり、教会がなすべきことは、「受肉のかたちを再現することだ」と述べ、奉仕について述べます。
- ⑥ ここで記述される「奉仕」とは、しるしであって手段ではなく、他人を改宗させる手段でもなく、すでに存在している神の国のしるしです。
- ⑦ 本書は、「宣教の目的は、人間の自然的な生活に宗教的次元を付け加えることにあるのではなく、その自然的な生活に生きる人間をして、人間という真の存在（人間らしく生きる人間）たらしめるとことにある」と結論します。

わたしたちは、教会がする宣教において、自然的人間と出会うことによってキリストに出会っているのです。

5 宣教基本方策・宣教基礎理論 京葉中部教会の場合

現在のわたしの任地である京葉中部教会とこれを設置した日本基督教団職域伝道の歴史を挙げて、宣教基本方策と宣教基礎理論は決して机上の空想的書き下ろしではなかったことを述べたいと思います。

(1) 京葉工業地帯に始められた京葉中部教会

農業国から重化学工業国へと産業構造の変貌を遂げようとした1960年代、各地に工業地帯の造成が始まりました。政府の新長期経済計画によれば、千葉県全体の工業地帯新規造成面積はこれまでの京浜・中京・阪神・北九州工業地帯とほぼ同面積である5545万㎡であって、そのうちの約1333万㎡、つまり全国の新規造営面積の24%にもなる面積でありました。京葉中部教会は、新規造成工業地帯の一つである京葉臨海工業地帯に設立されました。

(2) 教団職域伝道委員会の働き

1950年の第6回日本基督教団総会は「総合伝道委員会」を設置しました。後にこの委員会は「職域伝道委員会」を設置します。⁽¹⁰⁾

京葉中部教会が設置される前年の1961年、伝道委員会には「農村伝道委員会」「婦人伝道委員会」「青年伝道委員会」に加えて「職域伝道委員会」の4専門委員会が置かれて、この年の職域伝道委員会の委員は、松本美実（長）、湯川文人（書記）、向井芳男、隅谷三喜男、金井信一郎、加藤勇、竹中正夫、高倉徹、そして、京葉中部教会の初代の主任担任教師となる石丸実の9名でした。

委員をわざわざ列記するのは、京葉中部教会初期の特別伝道礼拝や講演会などの記録を読むと、この委員会の方々が説教者や講師として頻繁に登場するからです。職域伝道委員会が京葉中部教会の出発に委員会ぐるみと言ってよいほどの力を注いだことが推測されます。

この職域伝道委員会の任務は、労働者を対象とする伝道でした。日本基督教団の委員会は、教団総会において可決された事項の執行機関ですから、当然のことながら前述の「宣教基本方策」と「宣教基礎理論」の理念と条項を全うすることが求められます。この委員会の1968年の教団機構改正によって廃止されるまでの18年間の歴史も例外ではありませんでした。

「宣教基本方策」と「宣教基礎理論」の策定前、職域伝道委員会の1950年代の働きは、「労働聖日の設定（1954年）、「働く人」の創刊（1958年）、職域センターの設置、労働大学の開校、各教区における「職域伝道協議会」など、この世に奉仕する姿勢を貫こうとしているものでした。「宣教基本方策」と「宣教基礎理論」はこのような実践に基づいた教会のこの世に奉仕する姿勢を明文化・理論化したものであったと言えます。「宣教基本方策」と「宣教基礎理論」は、机上の空想的書き物ではなかったことがわかります。

(3) 教会が建てられた地域の丁寧な分析と「伝道」方針の策定

日本基督教団職域伝道委員会がこの地にどのような伝道を展開しようとしたのか、京葉中部教会の初代牧師石丸実がこの地にどのような伝道を展開しようとしたのかを知ろうとするとき、「京葉工業地帯長期伝道計画参考資料」という貴重な資料があります。

これは、明治学院経済学部金井信一郎教授の助言を受けて石丸実牧師が作成したものです。この資料集は、第1項から2項に千葉県の産業計画概観、京葉工業地帯形成の現状が分析されていて、第3項では「京葉工業地帯伝道を巡って」と題し、住民の社会構造、意識構想、とりわけて労働者の意識を、新経済機構の影響、出身社会よりの影響、賃金水準からの影響、居住形態からの影響において分析し、最後に第4項において伝道の基本的構想が記述されて「京葉伝道総合計画（試案）」がまとめられています。

ひとつの教会が建てられ、伝道が開始されようとする時に、地域社会の様子が、特にそこに住む人々の意識と直面している課題が丁寧に分析され、これに応える伝道計画が構想されているのです。

この資料にある「伝道の基本的構想」にはこう書かれています。⁽¹¹⁾

「既述のような計画と問題性をもった京葉工業地帯に対する伝道の構想を立てる場合、教会の側において少なくとも以下に列挙するような問題の自覚が必要であろう。

- (1) 教会のministry (牧会職務) の概念の神学的再検討
世界の主キリストの我々への「委託」の内容と範囲の検討
- (2) 教会のmission (伝道) の概念の検討 直接、間接伝道、奉仕の概念の検討
- (3) 社会、文化、歴史に対する教会の責任の自覚
- (4) キリスト教の社会正義観に基づく、産業、社会、地域社会形成の正しい方向の測定と指導理念の確立
- (5) 教会の階級的、閉鎖的性格の克服 インテリ、中間層中心の体臭とプログラム、自己中心的性格の反省
- (6) 教会の自由私企業的又は無計画、偶発的な形成と伝道態勢の再検討
伝道の責任圏設定と、責任的な活動内容の原理的、また、方法的検討
- (7) 新設教会の機能的配置
以上の諸点に関する検討から、京葉伝道の基本的構想として、次のような問題点が摘出されねばならないと考える。

- (A) 工業地域社会形成に伴う社会的、政治的、また精神的な諸問題に対し、キリスト教社会倫理の視点からの展望をもち、共同責任的な関与と奉仕、又、指導をなし得る体質と体制をもった教会を形成する (教会の体質改善)
- (B) 教会の伝道責任圏を制定し、GROUP MINISTRY を実施して京葉地域の全教会が多領域の問題と課題に共同で対処し、それらを専門化して分担し、又、総合的に処理出来る組織をつくって活動する (伝道圏構想)
- (C) 特別開拓伝道委員会と総合伝道研究所を設置して、上記の諸問題を原理的に、又、方法的に研究し、又、処理する。」

1961年に始まった京葉中部教会の歴史を概観するときに強く思うことは、上記の「伝道の基本的構想」はもちろん、日本基督教団が策定した「宣教基本方策」と「宣教基礎理論」が、この教会の伝道活動において実にいきいきと生真面目に実行されていることです。

(4) 京葉中部教会の課題

もちろん、京葉中部教会には、取り組まなければならない課題が存在します。それは当初から直面していた課題でした。

1958年の「福音と世界」に「労働者伝道の現在と将来」と題する座談会の記事があります。この座談会は「日本のキリスト教会は、中産インテリ層への伝道には成功しているが、労働階級との接触が非常に少ないのではないか」との司会を務めていた隅谷三喜男の切り出しから、ある労働組合の指導者の「(教会は労働組合運動の) じゃまだけはしないでくれ」との言葉が紹介され、教会の「中途半端さ」「異

質性」そして、「個人主義的性格」が問われます。そして、京葉中部教会の初代牧師となる石丸実が下記のように発言します。

(石丸実)「・・・ 今までの伝道の方式ではだめだと思います。伝道の方策ではなくて、われわれの個人的な福音の理解そのものに対する反省と清算が問題だと思う。聖書の福音は、人間を単なる個人として一つ一つの霊として救うだけではなくて、人間を絶えず隣り人との共同体的な存在たらしめている。孤立存在から共同体存在に人間を押し出すものが福音だと思うんです。そういう面が強く教会の宣教内容になって来ないといけないと思います。」

これは、石丸実牧師が京葉中部教会に赴任する3年前の発言です。彼は1962年に京葉臨海工業地帯に来て製鉄工場の日雇い労働者として伝道を開始したのです。

日本のキリスト教会は中産インテリ層への伝道には成功しているが、なぜ労働階級との接触が非常に少ないのか。働く人々と彼らが抱える問題に教会は本当に隣り人となり得ているのか。これが京葉中部教会の当初からの、そして、今日的課題です。

これは、放棄したい課題であるかもしれませんが、しかし、わたしたちが工業地帯のただ中に在ってこの課題を無かったことのようにして自己中心的な殻に閉じこもり、専ら教会の維持の為にエネルギーを注ぐ半世紀前に後戻りする必要はないと考えるのです。

6 教勢低迷の原因は宣教基本方策と宣教基礎理論にあるのか？

2013年、日本基督教団宣教研究所が発表した「改定宣教基礎理論」は、現在の教勢低迷の原因は宣教基本方策と宣教基礎理論にあると主張していますが、本当にそうでしょうか。

(1) 改訂宣教基礎理論まえがき

現在、日本基督教団において審議中の「改訂宣教基礎理論」の「まえがき」にはこう書かかれてあります。

「まえがき 宣教基礎理論の改訂にあたって

今回の日本基督教団宣教基礎理論の「改訂」は、1963年の「宣教基礎理論」がすでに作成されて約半世紀も経っているばかりでなく、その神学的妥当性にも少なからぬ疑義が生じたためです。

ことに教団は1969年のいわゆる「万博問題」以来、福音理解においても、宣理解解においても、はなはだ大きな混迷と混乱を経験し、その中で教勢も著しく低迷し続けています。この混乱の原因の一端は、先の「宣教基礎理論」において、「神との和解」という垂直的次元への言及が著しく欠落していたからだと考えられます。

(中略)

「そこで、宣教百年の盛り上がりを機に作られたものが、先の「宣教基礎理論」であったと言えます。その主眼の二本の柱のうち、特に「教会の体質改善」には相当の大きな神学的問題がありました。

その主張は、これまでの教会の「内向き」の体質・姿勢を批判し、教会はもっと「社会の激変」に対応するよう、「外向き」の姿勢をとらなければならない、というものでした。

しかし、この「外向き」になるという主張は、必ずしも教会形成や伝道がその主要な内容ではなく、むしろ、社会や歴史への直接的な関わりや社会変革に力点があったため、やがて「教会派」と「社会派」との著しい対立と相互の不信を生み出す結果となり、教勢の著しい停滞を来しました。」

(「改定宣教基礎理論 まえがき 第一次草案」)

日本基督教団の会員数は、1990年代に最大数となったのであって、教勢低迷の時期を「1969年のいわゆる『万博問題』以来」とするのは間違いです。更にこの「改定宣教基礎理論まえがき」は、その原因を述べてはなはだしい間違いを犯しています。つまり、現在の教勢低迷の原因は、宣教基本方策と宣教基礎理論にあるというのです。

(2) 牧師であるわたしはどうであったか

1979年の春以来30数年間毎週繰り返して来た説教。礼拝説教の任務は、聖書の解説だと思っていますが、聖書に示されている真理は、常にわたしの外に存在して、常にわたしに「分からない」という感情を起こさせます。

分からないことに取り組んで、毎週日曜日ごとに分かった気持ちになるかということ、そうではなく、常に「分からない」という感情が残る。これを30数年繰り返しています。「垂直的次元がなかった」などと言われると悲しくなります。

牧師として働いた30数年間を振り返ると、「改訂宣教基礎理論」の用語を使えば、わたしは「内向き」であり「外向き」であった。「教会派」であり「社会派」であったことになってしまいます。

(3) 信徒たちはどうであったか

わたしは、21年間北海教区にいました。最後の8年間は、教区幹事という仕事をしていました。簡単に言うと、教区に在る64教会の世話をする役割でした。その役割の内、年間8000万円弱の予算執行と人事に神経をすり減らしました。

「真剣勝負」という言葉があります。教会役員会に呼び出されて、教区を代表して会堂建築の資金繰りのことであるとか後任主任担任教師人事の相談に乗ります。

その時に、ちょっとでもいいかげんなことを言うと、役員会からバツサリと切り付けられる。そのような緊張が続く毎日でした。

当たり前であると思います。小さな町で一つの教会を守りぬくということは、それ位の真剣さが教会の皆さんに求められていたのです。

何度も教会を訪ねる度に、わたしは「その教会を支えているのは信徒たちなのだ」と痛感しました。牧師は10年も経てば異動します。しかし、信徒の皆さんは一生、その町に住み、その教会を支えているのです。そこに注がれる力と真剣さは想像もつかぬほどの膨大なものだと思います。

幹事をしていた8年間で、一番の思い出と言っても良い記憶があります。芦別教会の信徒であった方の記憶です。その教会の宗教法人法上の書類を整えなければならず、Sさんを教区事務所に呼び出した時の話のことです。

Sさんが居られた芦別教会は、1960年代の初めに炭鉱の住宅街で始まりました。芦別の町の周辺は良質な石炭が採れ、町は人口が増え、たくさんの方が教会に集まっていました。

しかし、もうその時代にはエネルギー政策の転換が始まっていたのです。芦別周辺の炭鉱は次々と閉山しました。町から人が居なくなり、教会からも人が居なくなり、1987年に芦別教会はその歴史を終えました。

書類作成が終わって帰り際、Sさんは突然わたしに「気がついたら（芦別教会の信徒が）3人だったのです」と言われました。そして「教会を無くしてしまい、申し訳ありませんでした」と涙を流しながらわたしに謝りました。

「いや、Sさん、わたしに謝られても…。」 その時のわたしの返事はそれだけでした。

謝らなければならないのは、わたしの方だったのです。

教区において「ひとつの教会が倒れる時、その時は、教区の全ての教会が倒れる時なのだ。その覚悟が必要だ」と言っていたのはわたしだったからです。

芦別教会は政府のエネルギー政策の転換によって、その教勢が低迷し、閉じなければなりませんでした。「改訂宣教基礎理論」は、この信徒のSさんについても「教会形成や伝道に熱心ではなかった」と言うつもりなのでしょうか。

「宣教基本方策」と「宣教基礎理論」を極めてまともに実践し、「革新・連帯・平和」の標語をもつ北海教区の教会だから、教勢の低迷を招いたのだとでも言うつもりなのでしょうか。

【注】

(1) これは、1967年のイースターに鈴木正久教団議長名によって発表された。

(2) 長沼ナイキ基地訴訟

北海道夕張郡長沼町に航空自衛隊の「ナイキ地对空ミサイル基地」を建設するため、農林大臣が1969年、森林法に基づき国有保安林の指定を解除。これに対し反対住民が、基地に公益性はなく「自衛隊は違憲、保安林解除は違法」と主張して、処分の取消しを求めて行政訴訟を起こした。

一審の札幌地裁は「平和的生存権」を認め、初の自衛隊違憲判決で処分を取り消した。国の控訴で、二審の札幌高裁は「防衛施設庁による代替施設の完成によって補填される」として一審判決を破棄、「統治行為論」を判示。住民側・原告は上告したが、最高裁は憲法に触れず、原告適格がないとして上告を棄却。

(3) ある日、下校途中に札幌北光教会に寄ると、玄関前に札幌市内の牧師たちが「靖国神社国家護持法案反対」「ハンスト中」と書いたタスキ掛けで座り込んでいます。

当時札幌教会の牧師であった金井輝夫先生がハンドマイクで街頭を歩く人たちに向けて「わたしは戦争中、海軍の航空隊に居て編成された特攻隊の教官をしていた。たくさんの優秀な青年たちを失う経験をした。わたしは二度と戦争を起こしてはいけないと決意している」という主旨の呼びかけをしていました。

わたしは教会の中に入り、牧師たちに「なぜ、このような政治的な問題を教会が行うのか」と抗議しました。しかし、北星男子高校の方が2時間ほどわたしの話に付き合ってくれました。よくもあれほど丁寧に付き合ってくれたものだと思います。

エレミヤが言う「主の言葉がわたしの心にあって、燃える火のわが骨のうちに閉じ込められているようで、それを押さえるのに疲れ果てて、耐えることができません」(エレミヤ20章9節口語訳)との戦争反対の情熱にある大勢のキリスト者の姿に、わたしは変えられていったのだと思います。

(4) 「基督教新報」1963年4月20日 pp.5~8

(5) 「日本基督教団史資料集」(1998)第5編 p.179

(6) Jurgen Moltmann, “The Church in the Power of the Spirit: A Contribution to Messianic Ecclesiology” 1977 喜田川 信他(翻訳) J.モルトマン、『聖霊の力における教会』(1981)

(7) “Transforming Mission – Pradigm Shifts in Theology of Mission,” Orbis Books, 1991 デビッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換』2004 邦訳 下 p. 233

(8) K.Barth 1922 “Gesammelte werke 14 Der Römerbrief” K.バルト 1967 吉村善夫(訳) 『カール・バルト著作集 14 ロマ書』1968 pp.442f

(9) 〈ローマの信徒への手紙 21 章 1~2 節〉

(10) 職域伝道委員会は、1951年9月に開催された「第1回職域伝道協議会」の申し合わせに応じて、教団総合伝道委員会の下に設置されたものである。1952年の第7回教団総会はこれを正式に可決した。Cf.「日本基督教団史資料集」(1998)第3編 pp.228~229 spec.p.229「第一回職域伝道協議会の申し合わせ」

(11) 「京葉工業地帯長期伝道計画参考資料」pp.26~27

この資料の最後のページに附記として「この資料は金井信一郎先生の指導と助言を頂いて私が作成した。第三項、第四項は、私個人の意見であり、その責任は金井先生にはない。石丸実」とある。

この資料には発行年の記載がない。採用された資料から1962年頃に発行されたと推測される。

質問 A ひとつは、京葉の教会の教会の成長の過程の中で、何処で最初の意図から少しずつ外れて行くのか。もう一つは、毎日労働して汗している方からそうでない方へメンバーが代わってきた。それに対し先生としては、こういうところがあったのではないかと云うのがありましたら、試論としてきかせて頂けたらと思います。

質問 B 今のご質問と合わせて、私は、一度、先生の教会の礼拝に出させて頂いた時、幼稚園舎で礼拝をしておられました。私は職域伝道の教会ということを見て、礼拝に出て、教会形成というものが目に見える建物には固執しないことに立っておられることを見て、なるほどと感じました。しかし、幼稚園を作って、そのことも教会の大切な働きとしてやっていくことと、今、Aさんがおっしゃったこととの、歩み方について、どのように受け止めておられるのかを教えてくださいたいと思います。

山本 Bさん質問からお答えしますが、京葉中部教会は教会堂を持っていません。それは、会堂を建てて維持するエネルギーをぜんぶ外に向けろと言われた初代の牧師の考え方を信徒たちが継承して貫いているからです。

京葉中部教会は経常会計の一割が外部への献金として支出されています。広範な社会的な活動をしている人たちがおり、その人たちは這ってでも礼拝に出席する、そんな教会です。Aさんが質問して下さったことですが、このことは資料化されていないので、教会の皆さんから聞いて推測するだけなのですが、当初から中間インテリ層の方たちが力をもって働きはじめ、教会のリーダーシップを取っていくことになった。なぜ教会に中間インテリ層が残り労働者の人たちが去っていったのかについて京葉中部教会はこの設問から逃げているところがあります。きちんと分析しきれていないと思うのです。

ふと、外国の教会のことを思い出したのですが、アメリカの教会の例しか知らないのですけれど、礼拝の説教は非常にシンプルですね。これは戒能信生先生が言われたことですが、「日本の教会の牧師くらい、知的かもしれないけれど、面倒くさい話をする教会はない。日本の教会の信徒さんはよくも毎週日曜日30分も七面倒くさいお話を聞いてがまんしているものだ」と言われるのです。確かに、京葉中部教会の初代牧師である石丸実先生の説教は、ぼくらが読むと内容の濃い素晴らしい内容だけれど、それについて行けた人たちが中間インテリ層の人だった。説教の内容は、労働者が教会から去った大きな原因だと考えています。

人間生活における非常に本質的な問題を、とりわけ集中的に抱えているのが労働者の方たちだと思います。わたしが今住んでいる街は、外国人労働者がたくさん居られます。わたしは外国の青年たちに日本語を教える教室のボランティアをしているのですが、今や日本の社会が抱えている問題を外国人労働者の方々が集中的に抱えていると痛感しています。それらの人たちが喜んで教会へ来て、信仰生活を続けてゆくには教会はどうして行けばよいのだろうかと思っていますが、分かりません。考えているところです。牧師として反省することは、やはり説教のことではあるのですが、なぜ、教会に中間インテリ層が残り、工場労働者が去って行ったのか、かえってAさんのご意見を伺いたいです。

質問 A 最近私は感じているのですが、それは、あえて聖書の話に戻るのですが、イエス様は説教をあまりしていないんですね。そして、マタイ25章からずっと始まっているのですが、教会ははじめから教会として、貧しい者という言葉で表現されている人々に対して手厚く、第一義的に働いているんですね。そのことを最近痛感するのです。今言われた、日本の教会は長い説教をするが具体的な行動を誘発しない。納得するだけ。そういうことは確かにあると思います。又、おっしゃるように、日本の教会の歴史はまだ短いから、一生懸命罪の告白から赦しへ、相当のエネルギーを使わなければならないのは分かる。今、アメリカの例をシンプルと云われましたが、アメリカから来て頂いた方たちに説教をして頂くと、本当にシンプルで、原稿用紙などあまりもたないで、メモのようなものでお話をします。ドイツの場合もルター派教会は聖書と賛美歌、お話はものすごくシンプルです。だから、教会としての活動、ということが広がって行く、そのためには、もう少し信徒が教会での活動に時間を使うことが大切なのではないかと感じます。

質問 C 宣教基礎理論に関して二点の質問を致します。北海教区の宣教のベースには、宣教基礎理論がず

とあった。今の北海教区の様子は この宣教基礎理論を地道に取り組む中で形成されてきていると思いますが、残念なことに、北海教区で一緒に取り組んできた牧師が、教団の評議委員会で、一昨年だったか、今思えば、宣教基礎理論は間違いだったと思う、という発言がありました。これを突破口に今、宣教基礎理論の改定が画策されているようですし、さらに、それに追い討ちをかけて、今年の6月だったでしょうか。長崎総幹事が教団新報に宣教基礎理論の行き過ぎたところは暴力主義だった、ということを書いています。これを見て、北海教区のどこが間違えているんだ、北海教区のどこが暴力主義なんだ、と北海道にいるとそう思います。北海教区と宣教基礎理論と言う点で云えば、わたしはむしろ北海教区でしかできないことが一つあると思います。それは、宣教基礎理論そのものが40年も昔のもので、当時想定できなかった環境問題、人権問題とか、今のこの時代にあった事柄に対してどう取り組んだらよいか、という立場にたって宣教基礎理論を改定して行く、その作業ができるのは北海教区だけだと思うのです。今、これを全面否定して行こうという動きの中で、私たちは、是非、山本先生に書いて頂きたいと思うくらいです。もう一つは、キリスト教会の中でなかなか発言がないのは経済問題だと思います。今の日本の経済状況をどう捉えたらよいか、そのことをもう少し深く切り込んで道を示して頂きたい。そうした話がなかなかできないのが、中間インテリ層に伝道をしてきたつけが経済問題に切り込めない理由になっているのではないかと、思うのです。労働者階級に入っていこうと思うなら、その部分に対してどう思っているのか、ひとつの回答を持たなければならぬと思うのですが、如何でしょうか。

山本 新しい宣教方策基礎理論を作って行くことは必要だと思います。ただし、これは日本国憲法の改定の問題と同じだと思います。今の教団の政治状況に於いては、下手に改定の動きをつくと振り返りにあってしまい、さらに状況を悪化させてしまうことになるのかと思います。

先ほどお話したように、1963年の宣教基礎理論には、長期間に及ぶ実践的裏づけがあるわけです。さらに制作過程について言えば、現在日本基督教団で審議中の「改定宣教基礎理論」のような雑な作成過程ではなく、1961年の宣教基本方策と1963年の宣教基礎理論策定までの経過をコピーさせてもらいましたが、この場合は非常に丁寧な討議を重ねています。

1961年の宣教基本方策第一案はみんなに蹴られてしまいます。その内容が、精神主義的にかんがって伝道しよう、というものだったからです。しかし、各教区に試案がおろされて各教区が自分の教区の実践例にもとづいて意見を述べ、今、わたしたちがみているような宣教基本方策の内容にがらりと変わって行く。今回もそれぞれの教区の実践にもとづいた提案が必要だとわたしは思っています。

しかし、なかなかむずかしくて……。例えば原子力発電所の廃止を求める提案、北海教区総会で提案したらすぐ通るのですが、今わたしが居る東京教区ではそんなことさえ通らない。

質問 D 確認したいのですが、通らない、というのは、いわゆる、原子力関係で働いている人たちが沢山いるから、だめだということなのでしょう。

山本 これは皆さん聞かれたらびっくりするような話だと思いますが、原子力発電所の廃止を求める提案は「暴力主義者からの提案だから反対だ」というのです。1960年代以降「外向きに」なって暴力主義者によるこのような社会的問題に関わる声明を採択していきながら、教団は混乱し分裂し教勢の低迷を招いてしまったのではないかと、という話になってしまうのです。北海教区の総会の現場では考えられないような事態が起きているのです。

北海教区の幹事をしていたときに、台湾基督教長老教会と日本キリスト教団の協議会があり、私はディヴァン・スクルマン先生と台湾の高雄での会議に参加しました。その時、台湾の人たちから「日本の防衛政策について日本キリスト教団はどういう見地を持っているか」という質問がありました。それで、日本側のある人が、日本国憲法九条に基づいて防衛政策を考えている、と説明すると教団の一人の幹事が手を上げて、「今、日本キリスト教団の中で憲法第九条を擁護しようとする人たちは、暴力主義者たちである。教団を混乱に陥れた人たちである」と発言したのです。そこで、わたしは「わたしは憲法第九条を支持するけれども、教団を混乱に陥れたつもりはないし、そんなことをした覚えもない」と発言すると台湾のひとたちはみんな笑って「日本キリスト教団は混乱していますね」と。こんなやりとりを台湾長老教会の人たちの前でしなければならない、これは数年前の話ですが、そんな状況があるのです。

質問 E 私は北海教区に10年くらいしかいませんが、暴力主義者の現状は分かるつもりです。そういう

状況におかれた人たちの感覚の違いがあるのは現実問題であるということを前提に考えなければならぬとわたしは思うのです。私は任地の町にいて、できたか、と云うと全然できない。牧師会の中でも決めかねるかもしれないし、信徒の問題にするということは絶対に不可能と言い切れるほどです。どなたかのご意見のように、教会の中に宣教にかかわるいろいろなことを話し合い、学ぶ時間をもっと増やして行ったらよいという意見がありましたが、大賛成です。ただ、宣教問題と言うとき、各教会に於いてかなり違うと思うのです。違うことをやってみるということによって今の時を過ごすしかない、と思うのです。つらいことですが、遅れたことをやっているのか、とうことになるのかも知れませんが、そうしたものを、なまぬく聞こえるかも知れませんが、切り捨てない。20年くらい経ったら何か変わるのではないの、という感覚でやってみるしかない時代かなと思うのです。わたしは、混乱の時代とは云わないで、そういう時代として受けとめていく必要があるのではないかと、思うのです。本州に貴重な友人をもっていますが、山本先生がおっしゃっているように暴力的なものに関わるなよという人が多いです。彼らは、そういう場所におかれているのだという、彼らの現実を、われわれももっと勉強していくことは必要かなと思います。

質問 F 閉塞的な日本社会に何を伝えて行けば良いか、というご提案だったが、これはわたしの経験ですが、教会の中での説教で、罪の悔改めと改心があまりにも強調されて長く説教され続けてきたのではないかな、これは日本人の心にはよく訴えられる、あなたもあるでしょ、だからここで悔改めましょうね、というほうが訴えやすいという説教の方針であったのではないかなと思うのです。しかし、外へ向けて私たちは何を于行けば良いか、宣教というのは神の宣教への参加、参与なのですよ、というのが、教会、或いは、牧師さんによるのかも知れませんが、アメリカから渡って来たピューリタンのような宣教師が伝えるような清く正しく、まじめに生きて行く、というような説教が長く続けられてきたのではないかなと。あなたはあなたらしく、人間が人間らしく、というよりも、その人がその人らしく生きて行けば、こっちのほうがよいのではないかなと思うのですが、あなたはこれまで間違えた生き方をして来たから、がらりとかえて、という説教ではなく、あなたが本来のあなたらしく生きて行く、という説教のほうが、日本の教会の歴史の中をみてきて良いのではないかと、そのように強く思いました。

山本 云われるとおりでと思います。私は最近、なにを伝えるかと言うよりも、どう共に生きて行けば良いかということを考えます。そこで思い出される聖書の箇所は〈ローマ1章の17節〉の言葉です。そこには「福音には神の義が啓示されている」と書かれてあります。福音とはイエスが云われたこと、されたこと、だれかに出会って起った出来事。神の義（デカイオー）とは裁判長が無罪だと宣言した時に使った言葉。裁判長が無罪だと宣言する意味は、あなたは罪人だけれど特別に赦してあげる、という意味ではなく、よくよく調べたら罪人ではないですよ、という意味ですね。あなたに罪は無いのだと啓示、つまり、はっきりと示されている。わたしたちは「そのまま神さまに善しとされている」との福音を、いろいろな人に出会いながら実践して行く必要があると思います。沢山の罪人とされている人がこの日本の社会にあって、実はあなたは罪人じゃないのだ、と伝えて行く。それを言葉ではなかなか伝わらないから宣教活動によって実践して行く必要があるのではないかなと思うのです。

ありがとうございました。

司会 まだまだ沢山ご意見や質問があると思いますが、なぜ大事なのかという根拠を改めて確認できた思いになりました。きょう学んだことを、いろいろなところで分かち合い、実践して行きたいと思えます。

***** 質疑応答 「教職講座」 2014-10-14 *****

質問 F 今、気がついたのですが、最後の設問の手がかりは、歴史をしっかりと見る必要があるのではないかと。特に明治維新以降の日本社会の中でキリスト教が関わって行った状況を視野に入れる必要があるのではないのでしょうか。

質問 G われわれが問わねばならない中産階級への伝道は成功して、労働者階級に対してはどうだったのか、というわれわれに対してのチャレンジでしたが、しかし、逆に中産階級への伝道は成功したという根拠はどこにあるのか。つまり、何をもちて成功したと見るのか、その点がよく分からない

のですが。

山本 日本のキリスト教会の伝道そのものが成功していないといえるのかもしれませんが、私の体験をお話すると、岡山の琴浦教会に居た時、教会があった街はジーパンや学生服の80%を製造しているような工場労働者の街でした。1952年の伝道開始の頃、沢山の労働者が教会に来られたそうです。わたしがこの教会に赴任したのは、創立後35年経ってからですが、その教会に残っていた人たちは、中間層、インテリ層の人たちでした。

京葉中部教会においても同じことが起こっていました。初代牧師の石丸実先生がおられた時代は教会にたくさんの工場労働者がこられていた。若者もたくさんいた時代です。今、残っているのはどういう層の人たちかと言うと、隅谷先生の指摘のとおりなのです。いわゆる労働階級のひとたちが全くいないわけではないが、多くの方が去って行きました。残ったのはいわゆる中間層、あるいはインテリ層といわれる、大企業のサラリーマンや学校の先生たちなのです。そのような自分の経験があるので、隅谷先生の総括に私は共鳴するのです。

質問 H いくつかのことですごく触発され、考えさせられることがあって大変よかったですと思います。いまの問題について云えば、わたしは自分が農村のほうに身を置くのが私なりの姿勢。農村から都会に出たら、優秀な学生たちもおり、植村正久とかを学び、そうした中で弓町本郷教会に行き、また、神学生のときは信濃町教会で、地方から出て、家のしがらみがまったくない層の、インテリの人たちがいました。そういう人たちに語る、かなり知的レベルの高い、特に都会の教会、あるいは、県庁所在地の大きな教会はそういう人たちに向けての知的レベルの高い人たちが満足できるようなことを語ってきた。そういうことが日本の教会のこれまでやってきたことだったと思います。農村の教会、或いは労働者にとどく福音を、だれでもわかる、中学生くらいの人たちでも届くような福音を語ることが殆ど行なわれてこなかったことが、このような状況になっていることは間違いないと思う。わたし、かなり前に韓国の教会に行き日曜日にふたつの教会の礼拝に出席しました。ひとつはインテリ層の教会、もうひとつは街のおばさんたちが中心の教会、全く雰囲気が違う。そのおばさんたちが集っている教会では、みんなで手を叩きながら賛美歌をうたっている、そういうふうなものが庶民のひとたちには訴える力がきつとあるのではないか。わたしたちがなかなかそのひとたちに届くメッセージを語ってこれなかった。なんとかして、わたしたちが語るメッセージが、やさししことばで、しかし、だれの心にも届くことばで語らなければならないということが必要なのではないのでしょうか。

山本 さきほどのFさんの、近代日本キリスト教の歴史をきちんと総括しないと、この問題に取り組みないのではないかという指摘は確かにそのとおりだと思います。それから、今、Hさんのいわれたことについても、確かにそう思います。

先日、東京教区で有志の方々による集会を行いました。集会名は「変えなくていいんじゃないの、宣教基礎理論」でした。これはよく考えられた集会名でした。今、宣教基礎理論を作ろうという動きがありますが、今、わたしたちが言うべきことは、「変えなくていいんじゃないの」であると思います。この集会に戒能信生先生がきて下さり、この問題、つまり教会は中間層に成功しているがなぜ労働階級に成功しなかったのか、について、岸本先生が言われたことと同じことを言われました。まず、近代日本のキリスト教会の体質をもう一回見直さなければならない。それから、Hさんが言われたように、戒能先生が言われたのは「全世界の教会の礼拝に出席してみろ、牧師たちはシンプルな説教をしているぞ」と。戒能先生は、日本のクリスチャンたちは日曜の朝、あの七面倒くさい説教を30分間も我慢してきいておるものだ、信徒たちの粘り強さ、我慢強さは大変なものだぞ、という話をしてくれました。

つまり、教会でされる説教の問題は重要な問題だと思うのです。中産インテリ層に成功し、労働者階級に成功しなかったことの総括をそこに収斂させるだけではいけないと思いますが、牧師たちが考えるべき重要な原因なのではないかとは思っています。

質問 I あまり時間がないので、急いで話しますが、どの機関紙か忘れてしまったのですが、笑いかけた文章がありました。「開かれた教会」について、神の宣教というところから出てきたひとつのスローガンだと思いますが、「開かれた教会などと言っているから伝道不振になるのだろう、開かれた教会だから人がどんどん世の中に出て行って教会にはだれもいなくなったんだ」と云っているのです。

こんなことにまともに議論を、とは思いましたが、今、山本先生に、ひとつ伺いたいのは、神の宣教への批判として、神が宣教するのだから、教会と言う組織はいらないんだ、ということから教会は機能なくてよいのではないかと、ということが、実際には教会の働きを鈍らせていったのではないかと、という批判がありますが、それに対して山本先生は、この神の宣教というモデルのなかで教会、ならびにキリスト者の果たす役割は何であるとお考えになっていらっしゃるでしょうか。

山本 確かに今言われたことは、考えなければならない問題であることはよく分かります。

今、紹介した「現代に於ける宣教と礼拝」について、ミッシェル・デイの神学は間違いだ、と批判している論文がいくつかありますが、先生が言われたとおり、「それだったら、教会は要らないのではないかと」という批判になってしまうのです。この問題は、自分の牧師としての生き方そのものに関わる問題だと思います。

「教会が何かをする前にすでに神はこの世に働かされている」とのミッシェル・デイの神学を支持したからと言って、何もしなかったわけではありません。教会の牧師としてこの世に仕えたつもりでいます。特にクリスチャンではない方々のために仕えたような気がします。一体自分は何のために牧師として生涯ささげたのか、その責任をどうとるか、という話しになってくると思います。Iさんは、確かに、重要な問題を指摘されたと思います。

感想 J レジュメの4ページの最後のところに宣教の目的、というところが有りますが、ここに書かれていないことは、さっき、一番最初のところで救い、ということがありましたが、「世の人たちは救われて無い、教会の中に救いがある」ということはとんでもないことと私も思っています。ただ、救いということは神の業として人間の回復が起こる、人間本来の姿に回復がなされる、それは、神の業としてなされることで、救いということは神のなさっていることであり、これは「あなたの信仰があなたを救った」というイエスのおことば通り、信仰と必然的につながるものであり、そのこと伝えることが宣教の業であると思うのですが、その神さまのことが、ここには欠けているのではないかと思うのです。

司会 ありがとうございました。

